

禪の友

Zen no Tomo

1

January 2020

特集
高祖降誕会





ご本山だより

大本山永平寺

【こころの朝日】

大本山永平寺 ☎〇七七六・六三・三一〇二



元旦の永平寺は、寂静の暁に照らされ、綿雪は連なる瓦屋根を荘厳しています。

さて、「二年の計は元旦にあり」と申しますが「一日の計は晨あしたにあり」とも申します。何事も、初めのころざしが肝心なのだ^と心に留めるものがあります。

永平寺では、一日の始まりに坐禅と勤行を修行いたします。当たり前のことですが、毎朝続けるのはとても有難いことです。

大雪や年末年始、正月や盆・彼岸など、どんな時でも欠かさずに修行いたします。永平寺の僧侶にとって、歯磨きや食事の如く、欠かせない修行の一つであります。

考えてみますと、朝の坐禅も勤行

も、しなくても何ともないことですが、しかし、修行することによって、清々しく一日を過ごせるのです。

法句経というお経に「もろもろの法は心より生ずる」云々とあります。汚れた心で語り行うならば、苦がその人についていくし、清らかな心をもって語り、行うならば、楽がその人について従うというのです。

一日の始まりに、姿勢を正し、呼吸を落ち着かせて、今日一日どんな自分でありたいか、我が身を顧みたいものであります。

「生ふりにし々世々の 罪過つみとがは 深雪のごとくふかくとも 悔ゆる心の朝日には消えて跡なくなりぬべし」

(修証義御和讃第一番)



ご本山だより

大本山總持寺

【新春を迎えて】

大本山總持寺 ☎〇四五・五八一・六〇二一



あけましておめでとうございます。新しい年を迎え皆さまのご多幸をお祈りいたしますとともに、被災地の復興と被災された方々の安寧を心よりお祈り申し上げます。

總持寺の新年は午前零時前の大梵鐘の撞き初めから始まります。そして大勢の人が行列を成して向唐門むかえからもんを通って仏殿にお参りし、引き続き大祖堂だいそどうへ向かいます。

大祖堂では江川禪師さまご親修の元朝大祈禱が行われ、引き続き明け方まで太鼓の音も賑やかに初詣祈禱が続きます。

初詣祈禱は三が日間、更に七日まで「特別大祈禱」が毎日行われ、期間中は十万人を超える初詣客で賑わいます。普段の坐禅修行を「静」とするな

らば、正月は「動」であります。「静」でも「動」でも心一つにして励ましあい、なすべきことを誠実に行じることが、まさに御開山・太祖大師の「茶に逢うては茶を喫し、飯に逢うては飯を喫す」「平常心是れ道」という教えの実践であります。

寒の入りとなる六日からは「寒行托鉢」が始まります。月末まで修行僧たちは毎日列を組み、鶴見の街を大きな声でお経を唱えながら托鉢します。

やがて總持寺では、「冬安居とうあんじょ」と称される一〇〇日間の集中修行期間が解制（修了）を迎えます。

首座寮しゆざりょうを中心に冬安居を無事に成し遂げた修行僧にとっては、厳しい寒さの中でも一足早い春の訪れを感じることでしょう。

選・坊城俊樹

銀のピン抜いて月下にほどく髪

岐阜県 大下 雅子

評 とても日常的な句である。いわゆる句を飾りすぎるといふ外連味が無い。それでも、嫺やかな情緒に彩られている秀句である。ことに、「銀のピン」の色彩が良い。金色のピンでは月光に妖艶すぎる。

望月を權で砕いて信濃川

東京都 鈴木 英治

評 おそらくは川面に映っている月の影を權でかいたときの景色と思う。信濃川という雄大な川を流れる月の美しさを權で砕く。それは、望の月であるからこそその、絵画的な美意識に彩られている。

◆ 石庭の余白天まで野分晴 千葉県 長澤きよみ

◆ 警策に似るラグビーのホイッスル 東京都 藤森 莊吉

◆ 心棒といふ棒折れそ秋暑し 三重県 荻屋 奈良美

◆ 微笑みて傾聴したり敬老の日 神奈川県 池亀 恵子

◆ 林間のかしこにひそむ秋の声 静岡県 石濱 徹

◆ 母眠る墓へとつづく曼珠沙華 福島県 大槻 弘

◆ 秋雨や焼かれし骨の白いこと 大阪府 岡 恭介

◆ 秋深し大きな家を壊す音 静岡県 望月 かほる

◆ メルヘンの世界から来る小鳥かな 島根県 藤江 堯

◆ 立山は神の屏風や天高し 山口県 御江 恭子

選者吟

野分過ぐ空にも沖のあるやうに 俊樹

作句小見 野分は台風のことである。熱帯性の低気圧である台風は、主に遠い南の海上からやって来てまた去る。それが到達し去って行くとき、海ばかりでなく空にも沖というものがあるのだと想像した句。

選・長澤 ちづ

大花火開きし後に音が来ぬ心といふは少し遅れる

岐阜県 後藤 進

評 光と音の伝わる速さには時間差があり、花火の音は後から聞こえる。誰もが知っていることだが、その花火の光と音の関係を、ある出来事とそれに反応した心の動きの比喩として詠い、何も具体には触れていないが詩的な説得力がある。

取りあえず笑っておきぬ難聴の亡母の嘆きを今に思えり

山口県 濱田 道子

評 難聴になり、はじめてかつての母の辛さを実感し理解できたこと詠う。「取りあえず笑う」という対応が母と同じことに気づいて作者は愕然とする。その機微が巧みに表現される。

◆ 村を出る足跡ばかり雪の駆春まで長き出稼ぎへ発つ
秋田県 小田篤恭

◆ 頂上で見下ろす海の表情に嵐の前の静けさを見る
鳥取県 山本浩一

◆ 秋刀魚漁収穫できず戻り来る船隠すがに海霧ひろごれり
福島県 大槻 弘

◆ 老いの趣味につくりし野菜調理する娘の振舞いに卓狭まりぬ
岩手県 穴戸 さとる

◆ 広げたる生初風に乾上がりて辺りに甘き香りを放つ
鳥取県 眞山博充

◆ 朝顔の蔓手繰りつつ釣瓶とりしあの朝顔の色を想いぬ
兵庫県 前田 あつ子

◆ 刻々と入道雲が立ち上がる真綿ひくよな小技も見せて
秋田県 小松 紀子

◆ 悠々と道よぎりゆく青大将客らを止めて待つガイドわれ
茨城県 田口 昭子

◆ 縦横に青田の上を走りゆく黄金色の風の足跡
兵庫県 待元 明子

◆ 友眠る名だけの墓にそれも良しロシア語極め英語教へぬ
ロサンゼルス 井上 健一

選者詠

サメの歯のごとき鳥影五つ六つ水平線に七つは見えず
ちづ

作歌小見 大伴家持の万葉の歌を訪ねて越中能登を旅してきました。台風の影響で慌しく帰ることになり残念でした。前田さん一首の「あの」は千代女の句のあの朝顔を指しています。小松さんは入道雲の小技の美しさを発見しています。